

# 2024 年度事業計画

2020 年から世界を震撼させたいわゆるコロナ禍は昨年、ようやく沈静化へ向かいました。まだ不完全ながらも、社会活動や経済環境、また教育の面でも以前の状態をようやく取り戻しつつあります。

そうした事業環境の変化の中で当財団は、経営課題として昨年に表出したいわゆる収支相償問題につきまして、特に公2事業である「ものづくり教室」の見直しを行い、財団全体として活動をより積極化、拡大化させたことで、この課題を克服出来る見込みです。

またコロナ禍が明けて、以前のような財団活動を復活させてきた中で、様々な学校の先生方や園の保育者の皆さまへ直接お伺いして、直にお会いし、言葉を交わすことの大切さ、必要性を再認識した1年でもありました。直接に直面し、会話やお互いの状況、時間を共有することで、我々としても全国の学校や園の現場の生の声や実態を把握することが出来、そして当財団の事業や理念を先生方へお伝えすることも出来たと考えます。また ICT 技術等を使うことで、距離や時間を超えて交流する効率性を学ぶことも出来ました。

他方、学校や園での活動が3年以上にわたり制限を受けたことで、教育実践、保育実践に少なからず影響が出たことも事実であります。こうしたことは各事業の論文応募数という形でも徐々に見えつつあります。

このような状況を踏まえて、当財団としては、全国の先生方、保育者の皆さま、子どもたちに対して、これまで以上にじっくりと時間をかけて、実際に直面する場をより多く設け従来の施策を強化するとともに、コロナ禍が明けつつある今だからこそ、それ以前の姿を目指すだけでなく、新しい活動や取り組みをより積極的に進める方針で取り組んでまいります。

折しも日本の教育・保育界を取り巻く問題は、非常に幅広く、年を追うごとに高度化、複雑化しています。教師・保育者数の不足やモチベーション低下、労働条件悪化、保育の2025年問題、カリキュラムの過密化、学力格差の拡大。こうした諸々の問題のうち、ソニー教育財団が世に対して貢献できる領域、内容にフォーカスしながら、これまで大切にしてきた「科学する心を育てる」保育と「科学が好きな子どもを育てる」教育の原点に立ち返り、事業を展開してまいりたいと思います。

## **【公1】 科学教育を中心とし、乳幼児と児童生徒の豊かな人間性の確立と創造性の育成を目指す事業**

教育実践論文募集をベースとした本事業は、当財団の主幹事業であり、論文主題に沿った教育・保育実践論文（学校・園対象）と教育実践計画（学校教員対象）を募集し、優れたものを選定し、その学校・園、教員個人に対し、助成を行うものです。また、助成するにとどまらず、その実践をベストプラクティスとして、他校・他園に紹介し、ともに研鑽していくことを目的としています。

### **1. 乳幼児教育(ソニー幼児教育支援プログラム)**

本プログラムは幼稚園・保育所・こども園を対象に、主題「科学する心を育てる」の保育実践論文を募るもので、創設から21年目を迎えた2023年度には、121園から応募をいただきました（20周年記念の昨年よりは約40園減少）。公立幼稚園・保育所の民営化、幼稚園のこども園化、少子化による園の統廃合など、幼児教育・保育を取り巻く状況が厳しくなっている中、「科学する心」の研究を継続されている連続応募園が全体の58%を占めていたり、これから主流になるであろう私立の“こども園”からの新規応募が多数見られたりすることは、本事業が保育現場にとって少なからず認められていることを示すデータであると考えています。2023年度に最優秀園に輝かれたみなみ若葉保育園は、11年間連続応募での受賞で、論文に取り組むことで、保育の内容、保育者の学び、保護者の「科学する心」の理解に変化が生じたと述べられており、今後もこのようなベストプラクティスを広く発信し、子ども一人一人に寄り添う「科学する心」の保育を広めてまいります。

### (1) 論文 PR 活動の強化(助成金の増額・新賞の設置・実践対象年齢の引き下げ)

2023 年度に開催された臨時理事会にて承認いただいた通り、保育実践論文の助成金が、小・中学校を対象とした論文と同額となります（最優秀園助成金：200 万円→300 万円）。また、「0 歳から“科学する心”は育つのではないか？なぜソニーの論文の対象は 1 歳児からなのか？」という多くの現場の先生方からのご意見も参考に、保育に関わる有識者とも議論を行い、論文に記載可能な実践対象をこれまでの「1-5 歳」から「0-5 歳」までと引き下げました。これにより、審査の観点も見直し、2024 年度は新たな「保育実践論文」スタートの年となります。さらに、論文全体としては上位入選には及ばないが、個性のある実践やアプローチに対して贈られる「保育みらい賞」も新設します（学校論文の「教育みらい賞」と同内容）。このような大きな変化を、園への論文説明会、幼児教育・保育団体・行政への働きかけ、メディア告知などでアピールし、論文へのチャレンジ（＝保育の質の向上）に繋げていけるよう活動してまいります。

### (2) 論文の質的向上につながる「実践事例」の学びを提供

2023 年度の論文の傾向として、園内外の環境をうまく取り入れたり、地域や専門家を巻き込んだり、0・1・2 歳児の遊びから「科学する心」を読み取ったりする実践が増えていることが分かりました。また、ICT 機器やアートを積極的に活用している園も増えています。こうした優れた保育実践を広く公開するため、2024 年度は、最優秀園 2 園、審査委員特別賞 1 園の計 3 か所での公開保育・研究会を予定する他に、論文にご応募いただいた先生、興味を持たれている先生方と「科学する心」について学ぶイベント等を実施します。幼児教育は、人間形成の基本となる時期であるため、保育関係者にとどまらず、小・中学校の先生方も共に学べる機会になるよう、財団内で検討をはじめています。また、毎月 Web や SNS で配信している「保育実践事例」の紹介と、毎年発行している『科学する心を育てる実践事例集』の内容をリニューアルし、保育・教育関係者により役立つ情報の提供を工夫します。

## 2. 子ども科学教育(ソニー科学教育プログラム)

本プログラムは小・中学校を対象とした「教育実践論文」と、小・中学校の教員個人を対象にした「未来へつなぐ教育計画」の二つの論文部門で構成されています。教育実践論文は「科学が好きな子どもを育てる」を主題に全教科等を対象とし、教育の実践と計画に関する論文を募集、優れた取り組みを進める学校に対して助成を行っています。また、未来へつなぐ教育計画は全教科等を対象に「将来、子どもたちが必要とされる資質・能力の育成」を設定し、その育成計画を募るものです。入選者にはその実践に向けた助成を用意しています。

### (1) 教育実践論文 応募数増加に向けた施策の展開

#### ■周知活動の継続的な強化

ここ数年、応募数の減少傾向が続いておりますが、今期は 68 校の応募に留まり、二期連続で大幅な減少となりました。他団体の理科系論文募集においても同様の現象が見られ、小・中学校の教員をとりまく複数の環境の変化（教科担任制の導入、働き方改革、中堅教員層の不足など）が論文応募の大きな足かせとなっていると認識をしています。一方で、従来応募がなかった私学や地域、さらには海外日本人学校からの応募もあり、応募教科の多様化を含め周知活動は少しずつですが、成果をあげています。2024 年度に向けてはすでに全国各地から活発な論文説明会など依頼があり、コロナ前と同様、財団事業の周知と理解を深めるイベント型の広報活動を積極的に展開する予定です。文部科学省や全国教育委員会連合会などの後援も得ることができ、募集要項に記載できるようになったのも追い風になると思います。また、若い教員への訴求のため WEB 媒体を使った広報などにもチャレンジし、更なる論文事業普及に努めます。

### ■魅力訴求による応募意欲の向上

2024 年度からは「教育みらい賞」を新設し、奨励賞の中から個性あふれるユニークな論文を特に評価いたします。これにより新しい視点で論文を応募していただくきっかけになり、論文の内容も多様化すると考えています。また、助成品目もソニー製品に限定せず種類を増やすことや、財団主催の自己啓発イベントへの招待などを検討しています。

### (2) 未来へつなぐ教育計画 さらなる認知度アップによる応募数の増加

2023 年度で 3 度目の募集となった教育実践計画には 45 名の先生方から応募をいただきました。前期より応募数は増加し、内容的にも資質や能力も多岐にわたるものが提案され、ユニークな実践計画が寄せられました。教育実践論文と同期して周知広報活動に努め、この論文部門を大切に育てたいと考えています。

### (3) 最優秀校のベストプラクティスをより広く共有できる仕組みづくり

#### ■「子ども科学教育研究 全国大会」の企画運営

教育実践論文の最優秀校（小学校 1 校、中学校 1 校）による実践事例を発表いただく全国大会を 2023 年度は富士見町立富士見中学校（長野県）と横浜市立白幡小学校（神奈川県）の 2 校において開催いたしました。特に富士見中学校の、動物の実物の臓器を扱った授業や、白幡小学校の授業研究会では、開催校以外の教員も参加し、新しい形での学びと教員間の深い交流が展開されました。また、ポスターセッションによる優秀校・入選者の発表は多岐にわたり、開催校の教員にとっても新たな学びの場になると評価されました。

2024 年度はすでに開催予定校である「刈谷市立刈谷南中学校（愛知県）」と「福島市立三河台小学校（福島県）」と検討を始めており、それぞれの学校・地域の個性に合った全国大会を開催する予定です。

## 3. 広報・IT 関連

### (1) 広報関連 新事業認知向上に向けた積極的な広報活動と Web サイトリニューアル

ここ数年、「ミライティーチャーズアカデミー」や「保育実践ゼミナール」など、新たな教員・保育者支援の活動をスタートさせてきましたが、「ソニー教育財団＝論文」というイメージが強く、新事業の認知不足が課題と感じています。井深大が始めた論文事業を中心に置きつつも、未来を生きる子どもたちのための教育・保育を支援する財団として社会的認知が得られるよう、2024 年度は Web メディアや広告出稿なども取り入れながら、積極的な広報活動を行います。また、こうした財団全体の活動内容を体系的且つ具体的に示すことができるように、Web 専門家によるコンサルティングを交えながら、Web サイトの全面リニューアルを行います。

### (2) IT 関連 論文管理システムのアップグレード

今期、教育と保育双方の論文事業について応募受付オペレーションを統合し、応募受付から審査結果の連絡や助成金・贈呈品の確認など応募校・園とのやりとりも可能なものとし、一連のプロセスを網羅し、ミスなく、スピーディーに対応できるものにアップグレードしました。これにより事務作業の簡素化だけでなく、個人情報管理強化にもつながりました。2024 年度はこのアップグレードが完了したシステムを安定的に活用し、使いこなすことで、業務の効率化と改善を目指していきます。

### 【公2】 科学教育を通じ、豊かな人間性確立と創造性の育成を目指す児童生徒対象の体験活動事業

この事業は子どもたちの内部にある「科学する心」を引き出し、大きく発揮できる体験を提供することで、「科学する心」の育ちにつなげることを目的としており、「科学の泉－子ども夢教室」「ソニーものづくり教室」の 2 つの事業

で構成しています。

## **1. 科学の泉ー子ども夢教室**

「科学の泉ー子ども夢教室」は、『自然に学ぶ』をテーマに、ノーベル化学賞を受賞された博士が塾長として、自然豊かな場所で共同生活を伴う5泊6日の探求教室です。これまで15回に渡って開催、卒塾生はこの経験を糧に様々な進路を選択して活躍しておりますが、24年度も開催を見送り、以下の理由で今後の方向性について検討いたします。

1. 塾長の志と思いを継ぐ後継者がおらず、長期的な継続が見込めないこと
2. 全国から塾生や指導員を集めた、長期宿泊を伴う活動計画が困難であること
3. 健康情報を含む個人情報の取得、取り扱いが厳格になり、管理が困難なこと

毎年3月の卒塾生が集う交流会は継続します。2023年度は東京工業大学にて、塾長の講義、卒塾生が行う研究発表を行い、オンラインでも配信します。この交流会は2024年度以降、卒塾生が主体となって企画・実施する体制に変更し、自立して交流ができる形を目指します。

## **2. ソニーものづくり教室**

2022 年は、公益財団法人の財務 3 原則の一つである収支相償に関する課題がありましたが、2023 年度は「ものづくり教室」活動をより積極化、拡大化することで大幅な改善を図ることができ、この課題を克服出来る見込みです。

### **(1) ソニー事業所主催の「ものづくり教室」の再活性化**

「ものづくり教室」は主としてソニーの事業所（工場）が、地域貢献活動の一環として開催しています。感染症の影響を受けた過去 3 年間は、実施回数が大きく落ち込みましたが、2023 年度は事業所に対して再開を働きかけ、また地元自治体などからも要請が有り、東北・関東・九州地区などで合計 39 回実施、850 名が参加しました。さらに、湘北短期大学の学生が授業の一環として、企画・実施までを含めた教室を 3 回開催しました。また数年間のブランクがある事業所に向けた講師育成講座も開催し、指導方法の学び直しも推進しました。この活動は 2024 年度も継続して、子ども達により良い学びの機会を提供する体制を強化します。

### **(2)「ものづくり教室」開催主体者の発掘と確保**

「ものづくり教室」を主催する組織・団体をソニーグループの外にも広げ、子ども達が科学への興味・関心を深めるための活動を展開しました。具体的には全国の科学館、公民館をはじめとして、地域住民とのイベントを開催している組織・団体、ボーイスカウトなどの青少年・女子の健全な成長を願う組織・団体にアプローチして、ソニーの事業所がある地域（東京都品川区・港区、神奈川県厚木市）に加えて、長野県、静岡県、大阪府、高知県など 21 回開催し、350 名が参加しました。また、開催団体は常に固定することなく、2024 年度には半数以上を入れ替えて、より多くの子ども達が参加できる機会を作ります。また、財団の思いを理解して一緒に開催をサポートして下さる施設を選び、一緒に学びの場を創出していきたいと考えます。

### **(3)ソニーグループ子会社との連携による、安定的な運営体制の確立**

「ものづくり教室」開催主体者の拡大に伴って、長年の実績がある大分県のソニー・太陽株式会社に協力要請を行い、安定的な運営体制を確立しました。ソニー・太陽は、障がいのある社員も活躍している、ソニーグループ株

式会社の特例子会社です。さらに、同じく特例子会社であるソニー希望・光株式会社にも講師やサポーター業務を依頼して、5 回の実施をしました。この両社は井深大の信念を受け継いでおり、障がいの有無に関わらず、誰もがチャレンジできるような取り組みを目指しています。2024 年度も、この 2 社に協力要請を行って、「ものづくり教室」の全国展開をはかります。また、障がいがある社員であっても確実に業務遂行できるように、実施後は振り返りを行って、改善を重ねながら、全体の質の向上を目指していきます。

#### (4)「ものづくり教室」の新コンテンツ開発

「ものづくり教室」の質を充実させるためには、新しい工作メニューの開発も大きな課題です。2023 年度には、ソニー・太陽に依頼して、新しいコンテンツの共同開発を行いました。これは、ソニー・太陽が強みを持つ音声技術を使った工作用のマイクロホンで、既存の紙コップスピーカーの原理を元としています。2024 年度には、小学生や中学生を対象とするトライアルを実施し、得られた知見を元に他事業所への展開をはかります。

#### (5)学校教育(授業)への展開

2024 年度は「ものづくり教室」を、学校教育の一環として取り入れる試みを開始します。通常の授業では実施が難しい「ものづくり」を通じて、失敗と試行錯誤を繰り返しながら、学びを深める体験を提供します。講師はソニー・太陽、ソニー希望・光の社員を中心として、既存の工作キットを使った教室から始め、新規トライアルの要素も取り入れながら進めます。

#### (6)高校生のエンジニア体験プログラム

高校生向けの「ものづくり教室」であるエンジニア体験プログラムは、自律型エンタテインメントロボット“aibo”の動作アプリケーションプログラムを、ソニーグループのエンジニアと共に開発するものです。2023 年度は難易度を見直して、タブレットを使用したビジュアルプログラミングがプログラミング初心者にも好評でした。2024 年度は、文系の生徒でも参加しやすいような配慮を加えて、“aibo”を動かしてみるだけでなく、ユーザーの目線に立った企画、チームでアプリケーションを作り上げるプロセスを体験する内容を考えています。

### 【公3】 科学教育を中心とした教員の質的向上を目指す研究・研修等諸活動を支援する事業

財団の目指す『『科学する心』をはぐくみ、『科学が好きな子どもを育てる』』には、現場を預かる先生や保育者の方々が、これらの理念をしっかりと理解いただき、効果ある教育・保育をいかに実践していただくが重要になります。財団の理念に共感し、ともに明日の教育・保育を考え、変革していく教員・保育者の発掘し、その支援を進めます。

#### 1. 乳幼児教育

##### (1)保育者ネットワーク(会員組織)の拡充

3 年前に発足させた保育者の個人会員組織（乳幼児のための「科学する心」ネットワーク）は着実に会員数が増加し、現在は 1060 名を超えました。このネットワークを生かし、財団と保育者、保育者間のつながりを深め、「科学する心を育てる保育」を共に学び合い、広めていく母体としていきます。

##### ■よい実践を見るための交通費助成の増加

小・中学校の教員と違い、他園の保育を見るのが少ない保育者が、当財団が主催する公開保育・発表会、イベントに参加するための交通費を助成しています。より多くの会員の先生に参加いただき、自園の保育の質の向上に努め、さらには論文応募に繋げていただけるよう、前年度より参加枠を広げます。

##### ■会員によるサークル活動の奨励と「夏フェス」開催

ネットワーク会員による自主的な研究会（サークル）に対し、年間 5 万円までの活動費を助成しています。

2023 年度には保育現場で動画を活用しながら“科学する心”を学び合う「動画サークル」が新設され、現在 9 つのサークルが鋭意活動しています。昨年ソニー本社で開催した「夏 Fesss! (サークルの活動発表会を兼ねたフェス) 」も非常に評判がよかったため、2024 年は会場を関西に変えて実施予定です。フェスは、普段は顔を合わせることでできないネットワーク会員がリアルで集まる唯一の場のため、先生同士のつながりを深めていただけるような内容を企画します。

■ 保育者育成団体と提携した「保育実践ゼミナール」の継続開催

保育者の教育研修団体として評価の高い「ぐうたら村」と提携し、「科学する心」の本質を考え、命や自然の循環について考える、未来志向の「保育実践ゼミナール」を継続開催します。

## (2) 幼保小連携プロジェクト「つながるまなざし研究会」普及へ

学習院大学の秋田喜代美先生、武蔵野大学の箕輪潤子先生、東海大学の齋來生志子先生を中心に、現役の 4 人の教員・保育者とともに 2022 年度に発足した「幼保小連携プロジェクト」は、その名称を「つながるまなざし研究会」と改め、活動を続けています。2023 年度には Web サイトやリーフレットを制作し、幼保小の先生方が共に語り合うイベントを仙台市、横浜市、福島市でトライアル実施するなど、普及に向けた準備を重ねてきました。行政による幼保小連携の枠組み整備とは異なる、子どもの「科学する心」を見つめる幼保小連携の新しい形として、2024 年度は本研究会について知っていただき、幼保小の先生方が一緒に参画できるイベントの開催など、普及活動を本格化させる予定です。

## 2. 子ども科学教育

### (1) ミライティーチャーズアカデミー

「トップリーダー研修会」を「ミライティーチャーズアカデミー トップリーダーコース」と改め、当財団主催研修として広く参加者を公募して「第 2 期」を開催しています。研修生は第 1 期から倍増の 24 名とし、全体テーマとして「2050 年に子どもたちが自分らしく生きられるように、あなたたちは何をしますか？」を掲げ、期間は 2023 年 6 月～2024 年 8 月までの 14 ヶ月間を予定しており、8 月 3 日に公開での成果発表会を開催する予定です。

並行して「第 3 期」を 2024 年 6 月～2025 年 8 月で開催を計画しています。公募によりさまざまな背景をもった多様な参加者で切磋琢磨し、1 期からの 3 期の縦軸のつながりをもって、意欲ある教員のあらたなコミュニティ作りも目指していきます。

### (2) SSTA との連携による授業研究の向上

SSTA はソニー教育財団の理念に賛同し、実現のために実践を推進する先生方の任意団体で、全国に 42 支部、約 1,400 名の会員を擁しています。自治体の枠を越えて全国の教員がつながり、教育実践論文の主題である「科学が好きな子どもを育てる」を共通のテーマにした授業研究や研修会の開催など独自の活動をしています。授業研究の最高峰を目指す「エリア研修会」では全国を 6 つのエリアに分け、複数の支部が合同で科学的な思考による学びを深め、次代の理科教育を創造することを研究するもので、集合形式の研修会が各エリアで開催され、エリアの特色にあわせた授業研究を 1 年サイクルで行っています。2024 年度は授業経験の少ない若手教員の育成に重点を置いた若手研もエリア単位で企画/実行される予定で、財団としても継続して支援していきます。

以 上